

家庭



ごみ袋を破って食べ物を見つけた—カンボジアで

握り返す小さな手は冷たかった

れた。カンボジアに来てから、撮影を嫌がられたのは初めてだった。

5歳くらいの子が体を寄せてきた。不安な顔つきで、私のズボンのすそをつかむ。片手にポリ袋を持っている。拾い集めたペットボトルが、袋の口からのぞく。これじゃあ、500リエル(約15円)にもならないか。一緒に働いている家族とはぐれたのだろう。

雨をもともせず、ごみ山をならすブルドーザーは、黒煙を吐きながら走り回る。危ないなあ。

男の子が私の手を握ってきた。真つ黒に汚れた手である。もっと安全な場所へ連れて行ってやろうと、その手を引く。ぎゅつと握り返す小さな手は、冷たかった。

見知らぬ人の手を引いたのは久しぶり。また明日も来ようと、気がわいてきた。

◇

うだ・ゆうぞう フォトジャーナリスト。63年生まれ、神戸市在住。

宇田 有三

バリツ、バリツ、バリ。何気なく空き瓶を踏みつぶしていく。「いたつ」。右足の長靴の底が破れて、ガラス片が刺さっている。慌てて靴と靴下を脱ぐ。ガラス片は、足の裏を少し傷つけただけ。廃棄された注射針でなくてよかった。それでも、もしかしら病気に感染するかもしれない。そう思うと、少し憂うつだ。

ひと雨来そうな空になってきた。乾期に入ったから大丈夫と思っていたが、甘かった。半時間もすると、大粒の雨が落ちてきた。

日よけの青いシートを張った屋台へ、裸足の子どもたちと一緒に駆け込む。雑炊や飲み物を売っている屋台だ。汗だくで麵をゆでるおばさんにかメラを向けると、顔をそむけ

